〔学会記録〕

東日本学園大学歯学会第4回学術大会

(昭和60年度総会)

―一般講演抄録―

(昭和61年2月15日，歯学部476講義室)

1．口蓋に発生した稀な増殖形態を示した骨腫の1例

江戸　稔，中出　修，舘山美樹，
賀来　亨，奥山富三，堀越達郎*，
村井　茂**　　(口腔病理
*口腔外科，**市立函館病院歯科)

骨腫は成熟した骨質の増殖からなる腫瘍で顎骨の内部に発生する中心性骨腫と外骨膜性に生ずる周辺性骨腫に分けられる。

組織学的には骨質に富み，全体が硬い緻密骨よりなる緻密骨腫 - compact osteomaと骨質が比較的少なく海綿質様の構造を示す海綿状骨腫 - spongy osteomaに分類される。

今回我々は，上顎左側臼歯部硬口蓋に発生した鶏卵大の稀な増殖形態を示した骨腫の1例を経験したので報告する。

患者は41歳女性で，20数年前より同部の腫脹に気づくも，無痛のため放置していた。

初診時口腔内初見：⌊5～8 口蓋側から上顎結節にかけ，約50×30mmの限局性で口腔内に突出した骨様硬度の腫瘤が認められた。

X線所見：同相当部に約50×30mmの境界明瞭で，すりガラス様不透過像を認めた。

CT所見：左側硬口蓋から軟口蓋にかけて辺縁は骨様の強い石灰化像を示し，内部は脂肪様の low density の構造をもつ腫瘤が認められた。

処置及び経過：G.O.F全身麻酔下に，⌊6 7抜歯後，腫瘤を口蓋骨の一部と共に切除摘出した。術後の経過は良好で口蓋穿孔部に栓塞子をつけた局部床義歯を装着し，言語障害，食事摂取障害の回復を計った。

病理組織所見：腫瘤の最表層は緻密に形成された骨質よりなる層で被われており，正常骨に近い構造を呈していた。しかし，その内部は海綿骨よりなり，比較的細い骨梁が無数かつ不規則に形成され，骨梁間には脂肪組織あるいは疎性結合織が存在している。

以上の所見により，我々は本例を口蓋に発生した周辺性の海綿状骨腫と診断するのが妥当と考えた。

質　問　　金澤正昭（口外・Ⅰ）

腫瘍の骨髄腔は，殆んど脂肪組織より成っているようにみえるが，これは骨髄組織の脂肪変性によるものと考えるか。

回　答　　賀来　亨（口腔病理）

おそらくはじめは骨髄腔を呈して，それが脂肪髄化したものと思われます。

質　問　　田中　収（補綴・Ⅱ）

骨腫による発音障害はどの程度であったか。また，特定の音に発音障害は生じなかったか。

回　答　　江戸　稔（口腔病理）

やや話しづらいという程度の軽い発音障害が認められましたが，具体的にどの音が話しづらいかということは確認していません。